

平成 28 年度第 1 回十日町市総合教育会議 議事録

1. 日 時 平成 28 年 10 月 27 日(木) 午後 1 時 30 分～

2. 会 場 十日町市役所 3 階全員協議会室

3. 出席者 市長 関口 芳史
教育長 蔵品 泰治
教育委員 山口 由美子
教育委員 吉楽 隆一
教育委員 庭野 三省
教育委員 佐藤 美佐子

説明のために出席した者

子育て教育部長	渡辺 健一	教育総務課長	長谷川 芳子
学校教育課長	川崎 正男	生涯学習課長	大島 満
文化財課長	佐野 誠市	スポーツ振興課長	井川 純宏
教育総務課長補佐	須藤 宣男	指導管理主事	山岸 一朗

事務局

総務部長	中村 亨	企画政策課長	鈴木 政広
企画政策課係長	齋木 直	企画政策課主任	曾根 惇史

4. 議 題 (1) ふるさと教育について
- ①文化・歴史における教育活動について
 - ②大地の芸術祭の関わりについて
 - ③キャリア教育について
(地元産業と職業観について)
- (2) その他

- 【会議資料】
- 資料 1 教育委員より提出された意見
 - 資料 2 学校で行われている文化・歴史における教育の現況
 - 資料 3 大地の芸術祭への関わり状況
 - 資料 4 学校で行われているキャリア教育の現況
 - 資料 5 近年の新規高卒者の雇用情報
 - (参考) 第二次総合計画前期基本計画基本方針 1－政策 2－施策 2

中村総務部長（開会）

関口市長（あいさつ）

本日は、お忙しいところお集まりいただきまして、ありがとうございます。次第にもありますように、本日は、平成28年度第1回目の十日町市総合教育会議ということでございます。

昨年度に開催しました総合教育会議におきましては、第二次総合計画において、教育分野で掲げる政策・施策を骨子として、十日町市教育大綱を策定し、市が向かうべき教育の方針として定めることが出来たわけであります。さらには、意見交換の中で十日町市の英語教育について議論を交わし、キッズ英語遊び塾やイングリッシュキャンプなどの効果的な事業の実施に結び付けることが出来ました。

教育大綱及び総合計画において基本方針の一つである「ふるさとを愛し自立して社会で生きる子どもを育てるまち」を掲げ、ふるさとを愛する教育活動の充実を図るために「住む地域や十日町市が好きと思う児童生徒の割合」を向上させるという、具体的な数値目標を定め、その達成に向かって、各事業に取り組んでいるところです。教育委員の皆さまからは、それに資するご意見をいただき、議論をすすめて参りたいと考えております。

また、今回の議題の決定については、総合教育会議のもう一つの目的であります、市長と教育委員会の皆さまが同一の認識のもと一致協力しながら教育行政に当たっていくために、教育委員の皆さまから議題について、ご意見をいただいたところ、この地域に伝わる文化・自然・芸術に関すること、地元産業に関することが多かったことから、今回は「ふるさと教育」を議題として提出させていただきました。

ふるさとを愛する子どもたちを増やしていくことが、次代を担う人材を育てていくこと、ひいては「選ばれて住み継がれるまちとおかまち」の実現につながっていくと考えております。

結びになりますが、この会議を通じて教育委員の皆様とは、今後とも、さらに一致協力し、十日町市として教育行政に当たってまいりたいと考えております。そのことについてあらかじめお願い申し上げまして、開会のあいさつとさせていただきます。今日は一日よろしく願いいたします。

中村総務部長

ありがとうございました。本会議の運営にあっては、市長が「総合教育会議」を招集することとされておりますことから、次第2以降の進行につきまして、関口市長から、進行をお願いしたいと思います。

関口市長

それでは、お手元の次第に沿いまして、私の方で進行させていただきます。まずは、議題1「ふるさと教育」についてということですが、資料が用意されているようですので、事務局から資料の説明をお願いします。

(議題1「ふるさと教育」についての資料1を長谷川教育総務課長が、資料2・3・4については川崎学校教育課長が、資料5については鈴木企画政策課長がそれぞれ説明を行う。(省略))

関口市長

それでは説明が終わりましたので、教育委員の皆さまにご意見をお聞きしたいと思います。いかがでしょうか。

山口委員

狭いコミュニティの中だけでなく、世界に向けた広い視野を持った中で、子どもたちがふるさと十日町市を愛するようになることが大切であるとする。

庭野委員

子どもの体験学習だけでなく、大人・親が越後妻有に誇りを持つことが大切である。例えば、中条地域でいえば地方と都市をつないだ尾台榕堂の歴史など、どれだけの大人が知っているのか。子どもに一番近い、親・大人が歴史を学ぶことが必要である。

吉楽委員

文化・歴史の教育活動というものは我々が子どもの時から学んでいることであるが、芸術に対する教育活動は非常に新しいものである。その源は大地の芸術祭であり、構想の時から地域を巻き込んだ中でやっという話があったことを思い出した。

20世紀の教育は、どちらかというと同じ考え方を全員が持つような指導が多かった。現在はそういった教育に終わりを告げ、一人ひとりが自分で考えて新しく生み出していくような資質が求められてきている。そこで教育活動の一環として、芸術という感性を持つようにすることは良いと思う。芸術から四季折々の自然を感じる、そういう「感性」が、着物のデザインや縄文関連のデザインなど新しいアイデアを生み出すことにつながるのではないかと、期待しているところである。

佐藤委員

松代小や松之山小の文化祭を拝見してきた。松代小2年生は、文化祭で地産地消の一環として、自分たちで野菜を育て、自分たちの給食を食べていた。子どもたちも、とても楽しいと言っていたことが、非常に印象的だった。松之山小学校は松之山観光大使と称して、地域のことを一生懸命調べている中でおじいさん、おばあさんの年代の皆さんの話を聞き、いろいろな方に語るという授業をしていて、一生懸命取り組む子どもたちに感動した。そういった学習の中で、地域に古くから伝わる歴史を子どもたちが学び、家に戻って家庭の中で会話として話すことがあるといいと思った。

蔵品教育長

国では新しい学習指導要領を作成中であり、年末には公表、年度末に告示という形になっている。今回の指導要領作成の背景として、情報化・グローバル化・AI化など、これから変化する時代が来るといえることがある。人工知能（AI）の発達が進むと、子どもたちの就職する職業が変化してくる。その時に、一人ひとりが考える資質をどう伸ばしていくか、それが新しい学習指導要領のテーマになってきている。子どもたちの学ぶ感覚・資質を身につけるためには「ふるさと」の魅力が関係していると思っているが、四季折々の自然、豪雪、里山などの自然と対峙する中で、その力を養っていくことが出来ると思う。

山口委員

大地の芸術祭を行うことで、人がなかなか赴かない地域に作家さんが入ってきて、地域と交流を行い、活力となっているし、子どもたちが自分たちの地域に自信を持つきっかけとなっているのではないかと思う。

吉楽委員

都市部へ学生が進学した場合、Uターンしてくる学生がどこの地域も減ってきている。帰ってくるようにするためには、地域の期待値を高めることが必要ではないか、夢を持つような何か戦略的な計画があるといい。十日町の出身というと雪・織物というイメージが根強い、そういった文化から新しいものを生み出し、グローバル化に対応して外へ発信していく仕組みがあると良い。

庭野委員

自分の私見もあるが、やはり芸術祭は越後妻有地域の最大の売りである。今後の発展を考えると中・高校生の関わりも必須だと考える。小学生は現状、関わりが多い。しかし、小学生の経験だけでは限界がある。中学生・高校生の関わりを増やすためには、校長会等で呼びかけを行った方が良い。中学生・高校生は市外・県外の地域の方々と交流し、その素晴らしさを体感することが出来る。それが出来るようなシステムづくりが出来ればよい。

蔵品教育長

大地の芸術祭という素晴らしい事業が育ってきており、昨年の来場者がおおよそ50万人、そのうちの5%が外国人の来場者である。今度の学習指導要領には小学生にも英語教育、外国語教育をしていくことが入る中で、そういった外国人と触れ合えるチャンスを生かすワークショップなどの取り組みをしていきたいと、私自身考えている。また、イングリッシュキャンプや十日町を英語でガイドできるようなボランティアガイド育成講座も学校以外の場でも行われているため、その実践の場としても子どもだけでなく大人も参加してもらいたいと思う。

関口市長

中学校は小学校に比べ、関わりが薄いように感じるため、残念なことである。今後はもっともっと働きかけを行っていきたい。しかし、中学生、高校生の中には子へび隊など、夏休みボランティアスタッフをやっていた生徒もいた。出来るだけ多くの生徒に触れ合う機会を提供したい。

来場者の5%が外国人となっていたが、とても多かった印象を受ける。ボランティアの朝のミーティングなど外国人の方は、皆さん英語で行う。来訪している中国・韓国などのアジア地域の方も、英語を上手に話すことが出来る。そういうことから、今後英語教育は重要である。

また、先ほどの話になるが着物の業界にも、新しい感性を持った子どもたちに入ってほしい。

庭野委員

同じ着物の生地でも、オリンピックのシンクロのユニフォームが話題になっている。もっともっと報道してもらって、十日町を発信してもらいたい。

佐藤委員

子どもたちの意見からも着物の施設に職場体験に行きたいという声は多い。興味・関心を持っている子どもはいる。また、親も晴れの舞台の日は着物に親しんでくれたらいいと思う。

関口市長

外に出かける日をはじめ、普段から日常的に着物を着てもらいたい。着物は着てみると楽である。

また、燕三条地域は「工場の祭典」という取り組みをしていて、脚光を浴びている。十日町市の企業は、どのようなことをしているか商工会議所・織物組合と一緒に見学に行っていると聞いた。工場が発信の場になるわけで、ものづくりの様子を見てもらうことで、品物の価値を理解してもらうことが出来る、いい機会である。そういう場は必要である。

吉楽委員

先ほど教育長が仰ったが、これから問われていくことは、ものづくりや何かを開発する、新たにサービスを提供するなど、全ては「感性」というところにつながっている。特許などの問題もあるが、日本独自の「感性」を持って作った商品は、他の国・地域から入ってきた商品では敵わないと思っている。商品の技術性は「感性」に帰結すると言われている。「感性」は幼児教育のときから、養うことが必要であるが、養ってきた感性を発揮する場の提供というものが重要なのではないかと思う。

庭野委員

十日町・津南の子どもたちの夏休みの発明工夫、工作作品は県展への入賞者が非常に多いため、閉校した学校に飾るのはどうか。夏休み一度きりの発表の場では、とてももったいない。素晴らしい作品が多くあるため、もっとPRすべきである。芸術祭の作品の一角（閉校した学校等）に設置すれば、作品鑑賞を訪れる地元の人など増えるのではないか。

蔵品教育長

庭野委員の仰る通り、十日町・津南地域の発明工夫はとても優秀だと話をよく聞く。今年も県展入賞のおよそ半分は、この地域の子どもの作品で占めている。そんな子どもたちを称えるという意味でも、何か発表の場があればいいなと思う。

関口市長

資料5について就職希望の半分くらいは管内にいる。大学生の人数は入っていないということか。

鈴木企画政策課長

大学生の人数は入っていない。高校生の雇用情報になる。

関口市長

一度、市外に転出して就学した学生等のUターン状況などは分かるのか。

鈴木企画政策課長

細かい部分までは把握できないが、全体の傾向としては、3～4年くらい経過すると十日町市に戻ってくる傾向にある。帰ってくるタイミングをチャンスと捉え、今現在これだけの就職先があることを理解してもらいたい。そのためには、小学生などなるべく早い時期から地元の産業、仕事を知ってもらうことは重要である。また、事業者の方からも、子どもたちに働きかけを行うことも大切である。

庭野委員

一つの職種に絞ってしまうが、今後の十日町市のことを考えると、建設会社の除雪のオペレータの確保は欠かせない。そういった職種の就職希望者が多くなく、現役のオペレータがやがてリタイアしていく時、この地域は大変なことになる。そういった人材の育成も必要である。

佐藤委員

自分にも大学生になる子どもがいる。小さい時にキョロロなどの施設で行った活動の中で、根付いた感情として、自然の豊かさは十日町が一番だという気持ちがあり、市外に出て、気づくことが多いようだ。就職先がないと帰ってくる事が出来ないのも、あると良い。

鈴木企画政策課長

資料5からも職業の求人は多い。ただし、それだけではなく地域おこし協力隊として市外からも入ってきている人もいます。

庭野委員

地域おこし協力隊の方々の話を聞くことがあるが、本当にこの地域は良いと聞く。そういった人の良さ、地域の良さを若い年代に伝えていくことも重要である。

関口市長

市外から入ってきて、別の視点で十日町の良さを捉えている隊員の話を知ることも良いのではないかと考えている。

次に（2）その他でご意見はないでしょうか。

山口委員

保育所不足についてだが、市内に子ども園が増えてきて、0歳児保育が増えてきている。先生方には、0歳児の集団教育は良くないのではないかと話も出てきている。例えば下条学園では15名くらいの赤ちゃん保育があり、中にはストレスを感じている子もいて、本当に正しいことかと疑問を感じている職員もいる。また、0歳児教育は国を滅ぼすというようなセンセーショナルな本も出版されている。著者は臨床心理士で、あまり小さい時から母子を分離してしまうと、思春期に問題が起きてくるという警鐘を鳴らしている内容である。しかし、若い年代の母親は職場復帰を考え、保育所に入れないことがないように入園活動を早めている傾向にある。子育て支援課から入園時期に関するアンケートなどの希望調査をもらって、対応してもらおうと未満児や0歳児から入園を希望する人も多くは増えないのではないかと。安心することが出来るのではないかと。ぜひお願いしたい。

渡辺子育て教育部長

このことについては、二通りのケースが考えられる。山口委員の仰られたような生活を送られている方々のほかに、父母の事情ではなく、勤務先の事業所の事情で預けざるを得ないケースもある。国も提案しているが、方策の一つとして、例えば一歳になったら入れるという予約保育のような方法が考えられるため、今後もどのような支援ができるか考え

ていきたい。やはり父母が安心して生活できることが大切である。

関口市長

あつという間に時間が過ぎ、いろいろなご意見を交わさせていただきました。それでは事務局は進行をお願いします。

中村総務部長

貴重なご意見等、ありがとうございました。残念ながら予定の時間となりましたので、次第を進めて参ります。閉会の挨拶を蔵品教育長をお願いします。

蔵品教育長

昨年からはじまりました総合教育会議は今回で通算三回目となりました。冒頭市長からもお話しがございましたが、この会議の趣旨は市長と教育委員会が教育施策を共有し、一致して執行にあたるという目的のための意見交換であります。その中で、本日もスムーズな意見交換ができたと思っております、ありがとうございました。本日のテーマは「ふるさと教育」ということで、大地の芸術祭をはじめ、たくさんのお話が出ましたが、ふるさととおかまちを支える人材になってほしいという期待感の中で議論いただいたと思っております。今回の議論をふまえながら、今後の施策の検討をしていきたいと思っております。

本日はありがとうございました。

中村総務部長

それでは以上をもちまして、平成 28 年度第 1 回十日町市総合教育会議を終了します。ありがとうございました。